

研究資料

## 海外スポーツ指導者派遣事業の現状と課題

### —JFAアジア貢献事業ブータン王国サッカーでの実践活動を中心に—

The current situation and the problems of the sport coach dispatch business

### —Thorough coaching Bhutanese national football team in JFA DREAM ASIA PROJECT—

松山 博明<sup>1)</sup> 土屋 裕睦<sup>2)</sup> 堀野 博幸<sup>3)</sup> 須田 芳正<sup>4)</sup>

Hiroaki Matsuyama<sup>1)</sup> Hironobu Tsuchiya<sup>1)</sup> Hiroyuki Horino<sup>1)</sup> Yoshimasa Suda<sup>1)</sup>

#### Abstract

In order to clarify the current situation and the problems of the sport coach dispatch business, this study aimed to reveal the experience of Japanese coaches who were dispatched to Bhutanese national football team. Participants were interviewed about the problems that occurred during the preparation before the competition and the competition itself. The finding suggested that before actually coaching, dispatched coaches should gain the information from Japanese Football Association (JFA) or former dispatched coaches about the country that they will take charge of. Moreover, it is important for coaches to gain information about cultures, habits and religion from Japanese who are in that country or international corporation agency. With this information, coaches need to carefully consider the training activities with local coaches to provide the most effective training for their players. Moreover, improving the sport development program such as physical education at school is important to provide the opportunity for young players to learn basic soccer skills from their childhood. In addition, it is important to cooperate with other countries such as making friendly matches to gain player's international experience.

キーワード ブータン, 代表チーム, トレーニング, コーチング

#### 1. はじめに

現在、日本代表サッカー選手23名中11名が海外のクラブで活躍する事例が見られ、また、ロンドンオリン五輪予選を戦った日本代表女子サッカー選手20名中4名が外国クラブに所属するようになった(高橋, 2012)。

一方、サッカー指導者についても、2012年か

ら前日本代表監督の岡田武史が、中国スーパーリーグ(中国サッカー1部リーグ)の杭州绿城の監督に就任した(高橋, 2012)。現在、韓国では、代表のフィジカルコーチをしている池田誠剛コーチ(KRNEWS, online)、ソウルFCの菅野淳コーチがいる(Sports navi, online)。また、タイリーグで指揮をとる日本人監督は、チ

1) 大阪体育大学大学院

2) 大阪体育大学

3) 早稲田大学

4) 慶応大学

Osaka University of Health and Sport Science

Osaka University of Health and Sport Science

Waseda University

Keio University

ヨンプリFCの和田昌裕，ナコンラチャシマーFCの神戸清雄，ランシットFCの丸山良明，タイ・ホンダFCの滝雅美の4人となった (samurai×TPL, online)。このように選手のみならず，日本人の指導者が海外でスポーツ労働者として職を得る事例がみられるようになった。

しかしながら，我が国で育成されたスポーツにおける指導者のうち諸外国で活躍している者の数はまだ少ないと考えられ，これらを推進していく取組が必要である (文部科学省, 2013)。こうした文部科学省が推進する中で，日本サッカー協会 (以下JFAとする) はアジア貢献事業として，アジアサッカー発展のために人材の活発な交流を行っている。その一つにコーチや審判員を養成するための指導者としてチーム審判インストラクターなどの人的支援・知的支援などのプログラムを提供し，アジア間での共存共栄を目指している取り組みがある。2011年8月までに，アジア諸国に代表 (ユース年代代表チームを含む) 監督やユース育成指導者を31名のべ16か国のアジア諸国へ派遣されてきた (JFA公認指導者の海外派遣, online)。こうして派遣された指導者の貴重な経験や指導実践での成果・課題は，蓄積され新たなコーチング・プログラム作成とその活用性に引き継ぐことが重要と考えられる。これまで，シリアU-17代表チームが大会に臨むに当たって「試合全般に対する準備」と「個々の試合に対する準備」が戦略・戦術的活動において影響することを明らかにした研究 (曾根, 2008) や田嶋 (2001) のU-17ア

ジア予選-世界大会に向けての経験的事実によって世界大会出場の結果へと導いた育成年代の事例がある。しかしながら，トレーニングについて，それが何を目的として行われ，実際の試合でどのような結果に結びついたのかという研究は，代表チームレベルにおいてはあまり存在しないとしている (松本, 2011)。

そこで，本研究では，海外スポーツ指導者派遣事業の現状と課題を明らかにするために，筆頭著者が，2010年7月からアジア貢献事業の一環として，ブータンでの約1年半にわたるサッカーの実践活動を基に実態を分類し，代表チームに関する施策を提案することを目的とする。

## 2. 方法

2010年7月から2012年1月までの活動記録をもとに，実践活動の分類を行い図1に示した。

### 2.1. 分類方法

分類の具体的方法として，準備期間中での課題と試合中での課題の2つに大別した。

準備期間中での課題について，JFA (2010) はAFCアジアカップカタール2011・日本代表チームの選手選考やトレーニング期間の在り方について述べている。JFA (2011) U-17日本代表チーム・メキシコ遠征でも，移動距離や時間，時差環境適応に関する調整について述べられている。したがって，国際大会に参加するにあたって報告すべき重要な項目として捉え，選考，トレーニング期間，移動，調整の4項目に分類

年	2010												2011											
	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12						
国際大会	ガバナーズカップ ①						AFCチャレンジカップ ②						南アジア選手権 ③											
国内リーグ	■	■											■											
トレーニング			■	■	■	■	■	■	■									■						
選考会			■				■										■							
OFF期間	■	■					■	■		■	■	■	■	■	■	■	■							

図1 年間スケジュール

した。

試合中での課題について、加藤（1994）は、サッカーに必要な要素として、技術、戦術、体力、そして最も基礎的な部分である精神的要素＝メンタリティの4つであることを述べている。また、松原ら（2006）は、フランスの青少年育成システムの年間計画の方針と目標の中で技術、戦術、フィジカル、メンタルの4つに分類したとしている。ここでの、フィジカルとは、サッカーに特化した行動するときの体力を意味する（長澤，2007）。したがって、「フィジカル」という言葉を体力面として捉えることとする。メンタルとは、「心的」「精神的」という意味があり、ここでは精神面として捉えた（山口，2008）。以上のことから、試合中のサッカーに必要な要素として、技術面、戦術面、体力面、精神面の4項目に分類した。

## 2.2. 分析対象となった大会

対象となった大会は、図1に示すようにガバナーズカップ、AFCチャレンジカップ、南アジアサッカー選手権の3大会であった。

ガバナーズカップは、インド北東部のシッキム州ガントク市で行われ、2010年10月21日1回戦インドのカメリア・ユナイテッドと対戦し、0-1で敗戦した。

AFCチャレンジカップは、ネパールでの本大会の前に予備予選がインド・グルガオン市で行

われ、アフガニスタン代表と対戦し、3月23日、第1戦目は、0-3で敗戦した。3月25日、第2戦目も0-2で敗戦した（AFCチャレンジカップ2012予選大会，online）。

南アジアサッカー選手権は、インド・デリー市で開催され、2グループに分かれてのリーグ戦を行い3戦全敗で予選敗退した。12月3日、第1戦目スリランカ代表と対戦し、0-3で敗戦した。12月5日、第2戦目インド代表と対戦し、0-5で敗戦した。第3戦目12月7日、アフガニスタン代表と対戦し、1-8で敗戦した（南アジアサッカー選手権2011，online）。

## 3. 結果

### 3.1. 分析対象になった大会活動日程と結果・スタッフ

表1は各大会における活動日程と結果、参加したスタッフの人員について示したものである。

### 3.2. 準備期間中での課題

表2は各大会における準備期間中の選考、トレーニング、移動、調整の課題を示したものである。なお、ここでの時期は、国際大会に向けてのトレーニング開始時から国際大会までとする。

(1) 選考会に関して、ガバナーズカップの時は3日間、チャレンジカップの時は16日間、南

表1：分析対象になった大会活動日程と結果・スタッフ

大会名	日程	結果	スタッフ
ガバナーズカップ	2010年 10月21日	1回戦(敗退)	監督,アシスタントコーチ1名,マネージャー1名,運転手1名の合計4名。
AFCチャレンジカップ	2011年 3月23日～3月25日	親善試合 ネパール代表(2敗)	監督,アシスタントコーチ1名,トレーナー1名,マネージャー1名の合計4名。
		予選敗退(2敗)	
南アジアサッカー選手権	2011年 12月3日～12月7日	予選敗退(3敗)	監督,アシスタントコーチ1名,GKコーチ1名,トレーナー1名,マネージャー1名,運転手1名の合計6名。

表2：準備期間中での課題

大会名	準備期間中での課題			
	(1)選考会	(2)TR期間	(3)移動	(4)調整
ガバナーズカップ	協会のスタッフと選手59名から25名選出した。協会のスタッフがサポートしてくれた。	メンバーが揃わない日が多かった。コーチとも連携しながら行った。	大会地に到着するまでに2日間要した。片道16時間のバス移動は選手に疲労とストレスを与えた。	バス移動の疲労が残った。トレーニングの設定が悪かった。
	9月16日～18日 (3日間)	9月21日～10月17日 (24日間)	10月18日～19日 (2日間)	10月20日 (1日間)
AFCチャレンジカップ	サルバンでの選考合宿では、選手25名から22名を選考した。コーチが上手くサポートしてくれた。	直前の日程変更や十分なメンバーが揃わない日が多かった。	ネパールでのバス移動6時間半で選手の疲労が蓄積した。	試合会場の気温が35度を超えており、暑さと湿気に対する調整不足であった。
	1月15日～1月30日 (16日間)	2月2日～3月13日 (41日間)	3月15・3月20日～21日 (3日間)	3月16日～3月19日 (4日間)親善試合
南アジアサッカー選手権	実施する十分な時間やメンバーが揃わなかった。選手22名から18名を選考した。	トレーニング期間が短く、効果的なトレーニングが出来なかった。	大会地に到着するまで2日間要した。移動中の問題はなかった。	大会までの調整がうまくいった。マネージャーが日程等の配慮してくれた。
	11月15日 (1日間)	11月16日～11月27日 (11日間)	11月29日～30日 (2日間)	12月1日～12月2日 (2日間)

アジア選手権大会の時は1日間かけて行った。チームや選手の連絡と準備・進行をブータンの現地スタッフがサポートしてくれた。しかし、選手の大半が、国内リーグ終了後トレーニングを行っていない状態であり、仕事や学校の関係で参加できなかった選手もいた。

(2) トレーニング期間に関しては、選考会後11日間から41日間行った。国際大会までのトレーニング期間が短いうえに、仕事や学校の関係で全員が継続してトレーニングできなかった。

(3) 移動に関しては、協会の予算の関係で、首都ティンパー市から大会地まで大半の行程を

協会所有のバスで移動することになった。南アジア選手権大会は、インド・バグドグラ空港までの行程を約12時間かけて移動した。ガバナーズカップは、インド・シッキム州ガントク市までの行程を約16時間かけて移動した。AFCチャレンジカップ予備予選前の調整合宿でもネパール・トリバン国際空港からポカラ市までの行程を約6時間半かけて移動した。

(4) 調整に関しては、ブータンの高度、気候などの地理的な条件から、大会地の暑さや湿気に対する対策がなされていなかった。また、調整を行うための施設が十分でなく、対戦する相

表3：試合中での課題

大会名	試合中での課題			
	(1)技術面	(2)戦術面	(3)体力面	(4)精神面
ガバナーズカップ	国際大会の経験不足から、パスミスやコントロールミスが目立った	大会までの期間が短く、戦術が浸透するのに時間を要した。	国内リーグ後、充分なトレーニングを行っていなかったため、体力面が低下していた。	国際大会の経験が少なく、かなり緊張していた。大事な場面で、集中力が続かなかった。
AFCチャレンジカップ	国際大会の経験不足や気候の変化もあり、パスミスやコントロールミスが目立った。	ネパール・ポカラ市の調整合宿で、自チームの戦術的課題がはっきり見えた。しかし、本大会では、全く機能しなかった。	移動時間や過密な試合日程のために体力や気力が続かなかった。また、気候の変化で体力的に厳しかった。	精神的な弱さを試合で露呈した。しかし、若手選手を起用したことで、ミスを恐れずに前向きに取り組んでくれた。
南アジアサッカー選手権	国際大会の経験不足から、パスミスやコントロールミスが多く、決定機にも得点できなかった。	大会で、予め劣勢が予想されていたため、全体的に守備的な布陣で臨むことになったが、全く通用しなかった。	国内リーグ後、充分なトレーニングを行っていなかったため、体力面で低下していた。	精神的な弱さと持続力がなかった。また、敗戦からか、試合中のモチベーションを最後まで維持出来なかった。

手チームと同じホテルやトレーニング時間が重なるなどの問題点も多かった。

### 3.3. 大会を通して試合中での課題

表3は、試合中での技術面、戦術面、体力面、精神面の課題を示したものである。

(1) 技術面に関しては、基礎的な「止めて蹴る」などのトレーニングを多く実施した。しかし、国際試合の経験不足などの影響から、ボールコントロールやパスによるミスが目立ち、試合を優位に進めることが出来なかった。

(2) 戦術面に関しては、技術トレーニング同様、多く実施した。また、国際大会で予め劣勢が予想されていたため、全体的に守備的な布陣で臨むことにしたが、選手のアプローチやポジショニングのミスが目立った。また、相手選手にボールを奪われた後のカバーリングが遅れ、バランスを崩し失点するケースが多かった。

(3) 体力面に関しては、国内リーグや国際大会終了後、トレーニングを継続的に行っていない選手が多く、基礎体力中心のトレーニングを多く実施した。また、国際大会までの十分な体力強化が出来なかったために、試合終了まで体力が持続できなくなる選手も多かった。

(4) 精神面に関しては、国際大会の経験不足から過度に緊張する選手や冷静さを欠く判断ミスから、ファウルの回数が増加した。南アジア選手権大会アフガニスタン代表戦の後半3分、チームキャプテンが冷静さを欠く判断ミスによって退場する場面があった。チームとしてもガバナーズカップ・カメリアユニテッド戦、前半14分の失点、AFCチャレンジカップ・第一試合目アフガニスタン代表戦、前半1分の失点、南アジア選手権大会・インド代表戦、後半12分の失点、アフガニスタン代表戦、前半3分の失点や後半3分の失点などいずれも試合開始直後14分以内に失点する場面や、南アジア選手権大会・スリランカ代表戦、前半29分、34分の失点、アフガニスタン代表戦、前半3分、9分、14分、18分の失点、後半3分、14分の失点など失点後9分以内に連続して失点する場面が多く精神面での未熟さを露呈した。

## 4. 考察

### 4.1. 準備期間中での課題

選考会やトレーニングに関して、松山(2010)は、選手が仕事や学校に通っているため、全員集まる日が少ない、と報告している。これは、国全体の代表チームの強化策である選考会やトレーニングに対する理解が乏しい結果だと考えられる。国内リーグ終了後トレーニングを行っている選手が多いために選考会やトレーニングに大きく影響した。しかも、選考会実施後、大会までの期間が限られていた。西(2008)は代表の強化は短期の強化のみでなく、日々の所属チームでのトレーニングによりなされているとしているが、ブータンでは、そうしたトレーニングに関する理解が不足していると考えられた。また、ブータン特有の文化や習慣・宗教を理解して慎重に進めていく必要がある。文化や習慣では、教育制度には試験の成績や通学日数によって留年制度がある(平山, 2008)。代表チームのトレーニングに関しても、学校や職場に理解を求めていく必要がある。高比良(2008)によると、初雪によって役所が休日になっている。トレーニングにおいても、初雪の影響により実施できないことがあった。それ以外に、ブータン暦の休日に関しても同様である。宗教的なものとして、ツェチュ祭の行事やブータン暦1月と4月の年に2回「肉なし月」があり、選手の栄養面での影響を及ぼした。

大会前の移動と調整に関しては、ブータンの高度、気候などの地理的な条件を考慮して行う必要がある。小鳥居(2012)によると、ブータンの首都ティンブーは、約2500メートルと高地にあり、国土のほとんどは急峻な山岳地帯であるため、移動はバスに頼らざるを得ない。そのため、首都ティンブーから国際大会参加の際の、長時間のバス移動は、選手に大きな疲労とストレスを与えた。海外で選手経験のある伊藤壇は、移動する手段や時間は、コンディション調整するうえで、非常に大切であると述べている(佐藤, 2011)。

それ以外にも、トレーニング環境の問題、対戦相手との配慮の欠如などが挙げられた。鈴木

(1995)は、海外遠征は日常と異なる競技環境あるいは生活環境下で行われるものであり、その実際については多面的な理解をすることが必要であり、国外遠征を行う代表チームにとっても、大会前の準備や調整を行い、現地の情報を事前に入手しておくなど、多面的な理解をしておかなくてはならないと指摘している。この点でもブータンの取り組みはなされていないといわざるを得なかった。

以上のことから、指導者は、事前に日本サッカー協会国際部や前任の指導者からブータンサッカー協会の方針、スタッフの構成、代表チームの現状やレベル、トレーニング環境などの情報を得ておくことが大切である。さらに、赴任時にブータンに滞在している日本人と日本が1964年からブータンに対する援助を行っている国際協力機構との積極的な交流を行うことが現地の有益な情報を得ることができ、その国の文化や習慣・宗教などの理解を深めることができる。

そのうえで、指導者は自国で学び培った方法をもとに、その国にあった独自の施策を現地のスタッフと一緒に慎重に進めていくことが大切である。

#### 4.2. 試合中での課題

試合中での課題の背景には、育成年代でのサッカースクールや地域クラブでの一貫した指導がなされていなかったことが要因だと考えられる。JFA強化委員長として日本サッカー発展のために強化にあたった大仁は、ジュニア層年代にどのようなトレーニングをするかが、個々の選手の伸長度に大きく影響を及ぼしていると述べている (JFA, 2000)。

技術面に関しては、育成年代で「止めて蹴る」というすでに習得しておかなくてはならない技術レベルがかなり低く、ほとんど毎日のようにトレーニングメニューに加える必要があった。

戦術面でも、技術トレーニング同様、多く実施した。特に、基礎的な個人戦術のトレーニングを多く実施する必要があった。チーム戦術においては、他国での親善試合を行う予算の関係

やブータン国内でレベルの高いチームが存在しなかったために自チームでの実践的なゲーム形式を多く取り入れた。

体力面に関しては、国内リーグや国際大会終了後、トレーニングを継続的に行っていない選手が多く、基礎体力中心のトレーニングを多く実施する必要があった。体力に関して、レイナー・マートン (2013) は、トレーニングを中断すると急速に体力の低下や不調を感じると述べている。したがって、体力強化のために継続的にトレーニングを行っていく必要がある。

精神面に関しては、育成年代からの国際大会の経験が少なく、十分なトレーニングがなされていなかったために、多数の選手が過度の緊張状態になり無駄なファウルや試合運びの未熟さを露呈した結果だと考えられる。試合中の過度の緊張感の因子の中で、金本ら (2002) は、「失敗するのが怖い」、「失敗するのではと不安に思った」の「不安因子」や「練習が足りなかった」、「試合に対する対策が不足していた」などの「準備不足の因子」などによって過度の緊張感をもたらされた」と示している。こうした不安因子を少しでも取り除くためには、国際大会などの経験を多く積ませる必要がある。乾 (1996) は、1995年ユニバーシアード国際大会で日本代表チームが優勝した勝因に中の一つとして、海外強化遠征による豊富な国際経験によるものと述べている。したがって、代表チームにおいても、数多くの国際大会を経験することは、非常に重要である。

以上のことから、育成年代からのシステムを構築させ、技術や戦術及びメンタルの指導を徹底させる必要がある。西 (2008) によると、各年代で発育発達に応じたトレーニングを指導者が共通理解の基に徹底することが大切であるとしている。しかし、松山 (2010) によると育成年代の指導を行うサッカー協会保有のグラウンドは、首都のティンプーで2面しかない。一方、学校には、グラウンドが整備されてきており、それ自体は基本的に「無償」で運営されている (松岡ほか, 2012)。したがって、育成年代からのシステム構築には学校体育の中でサッカーの

強化を行ってきた日本のように、学校体育での一貫指導の充実を図ることを提案する。そして、各学校にサッカー経験者を体育教師として派遣し、2011年から始まったサッカー協会主催のグラスルーツ・コーチングスクールに定期的に参加させることで指導力向上を図る。

代表チームに関しては、より多くの国外強化遠征による豊富な国際経験を積むために、ネパール、バングラデシュ、インドなどの近隣諸国との親善試合を積極的に行うことである。そのためには、ブータンサッカー協会と友好関係にあるクウェートサッカー協会や日本サッカー協会などに資金的な援助も含めて、大会前のトレーニングや多くの国際大会の機会を要請する必要がある。

## 5. まとめ

本研究では、海外スポーツ指導者派遣事業の現状と課題を明らかにするために、JFAアジア貢献事業の一環として、ブータン王国でのサッカーに関する実践活動を中心に強化環境の実態を準備期間中と試合中に分け、さらにそれらをそれぞれ4項目に分類し分析した。

(1) 準備期間中の課題として、選考会やトレーニングは、選手が全員集まる日が少なく、国全体の代表チームの強化策に対する理解が乏しかった。また、ブータン特有の文化や習慣・宗教を理解して慎重に進めていく必要があった。移動と調整は、ブータンの高度、気候などの地理的な条件を考慮し、大会前の準備や調整を行い、現地の情報を事前に入手しておくなど、国外遠征を行う際、多面的な理解をしておく必要があった。

(2) 試合中の課題として、技術面は、育成年代で習得されていなかったために基礎的なトレーニングを多く実施する必要があった。戦術面は、基礎戦術を多く取り入れ、自チームでの実践的なトレーニングを中心に実施した。しかし、近隣諸国との親善試合を行う機会が少なかった。体面は、継続的にトレーニングを行っていなかったため、基礎体力から実施する必要があった。精神面は、トレーニングや国際大会の

経験不足からの精神的な未熟さを露呈した結果であった。

以上のことから、次のような施策を提案したい。

派遣指導者は、事前に日本サッカー協会国際部や前任の指導者から赴任先の国の情報を得ておくことが大切である。また、赴任時にブータンに滞在している日本人や国際協力機構との積極的な交流を行い、有益な情報やその国の文化や習慣・宗教などの理解を深め、その国にあった独自の施策を現地のスタッフと一緒に慎重に進めていくことが大切である。

代表チーム強化のためには、育成年代から選手育成システムを構築し、基礎的な指導を徹底させなければならない。そのためには、各学校にサッカー経験者を体育教師として派遣し、学校体育での一貫指導の充実を図ることを提案する。その上で、友好関係にあるサッカー協会に資金的な援助を求め、近隣諸国との親善試合や大会前のトレーニング等を含め多くの国際大会参加の機会を増やす必要がある。

## 文献

- AFC チャレンジカップ2012 予選大会。  
<http://www.ja.wikipedia.org/wiki/> (参照日：2013年6月10日)。
- 平山修一 (2008) ブータンの歴史。明石書店：東京，pp.3-6。
- 乾真寛 (1996) 1995ユニバーシアード福岡大会におけるサッカー代表チーム優勝の勝因に関する一考察。日本体育学会，47：490。
- JFA (2000) JFAニュース増刊号強化指導指針 2000年版ポスト2002。JFA機関紙：東京，pp.5-36。
- JFA (2010) テクニカル・ニュースVOL. 39，JFA機関紙：東京，pp. 18-19。
- JFA (2011) テクニカル・ニュースVOL. 43，JFA機関紙：東京，pp.22-23。
- JFA公認指導者の海外派遣。 <http://www.jfa.or.jp/> (参照日：2013年6月10日)。
- 金本めぐみ・横沢民男・金本益男 (2002) 「あがり」の原因帰属に関する研究。

- 上智大学体育, 35:30-40.
- 加藤久・福林徹・大森一伸・山本利春・矢野雅和・西嶋尚彦・尾山末雄・吉田優子 (1994) サッカーがうまくなるためのからだづくり. 大日本印刷株式会社:東京, pp.130-142.
- 小鳥居伸介 (2012) 「持続可能な開発」論の可能性-「幸福立国」ブータンの事例から-. 長崎外大論叢, 16:59-72.
- KRNEWS 洪明甫・池田誠剛コーチの国境を越えた友情. <http://www.krnews.jp> (参照日:2014年2月15日)
- 松原英樹・入口豊・中野尊志・西田裕之・中村泰介 (2006) フランスの青少年システムに関する研究 (I). 大阪教育大学紀要, IV, 55:51-70.
- 松本直也 (2011) U-21日本代表サッカーチームにおけるトレーニング方法と得点経過について:第5回東アジア競技大会 (2009/香港). 桃山学院大学人間科学 (40), 43-63.
- 松岡重信・中嶋裕子・古達貴 (2012) アジアの開発途上国・地域における教育システムの研究 (2) -特にブータン王国の体育教育の現状を中心に-. 福山平成大学福祉健康研究vol. 7, 103-112.
- 松山博明 (2010) JFAnews2010 11月情報号NO. 319, JFA機関紙:東京, pp. 71.
- 南アジアサッカー選手権. 2011 <http://www.ja.wikipedia.org/wiki/> (参照日:2013年6月10日).
- 文部科学省 (2013) スポーツ指導者の資質能力向上のための有識者会議報告書. 文部科学省:12-13.
- 長澤純一 (2007) 体力とは何か-運動処方その前に-. 有限会社ナップ:東京, pp.8-9.
- 西政治 (2008) 日本サッカーにおける育成期一貫指導の重要性と課題. -世界に通用する選手育成-. 京都学園大学経営学部論集, 18, 1:173-196.
- レイナー・マートン:大森俊夫, 山田茂 訳 (2013) スポーツ・コーチング学. 三報社印刷株式会社:東京, pp.189-193.
- SAMURAI× TPL タイリーグに行こう. <http://www.tplip.net/> (参照日:2014年2月14日).
- 佐藤俊 (2011) 越境フットボーラー. 株式会社角川書店:東京, pp.59-65.
- 曾根純也 (2008) シリアU-17代表チームの戦術・戦術的活動に関する研究. 大阪体育大学紀要, 39:37-38.
- Sportsnavi FCソウルの躍進を支える日本人の存在. <http://m.sports.yahoo.co.jp/column/detail/201308200006-spnavi> (参照日:2014年2月14日).
- 鈴木茂廣・坂田勇夫 (1995) 海外遠征選手の心理的側面に及ぼす影響について. 日本体育学会, 50:505.
- 田嶋幸三 (2001) The Football Conference Japan2001・茨城:東京, pp.12-39.
- 高橋義雄・佐々木康 (2012) 日本スポーツ選手の海外移動とキャリア形成に関する一考察. 生涯学習・キャリア教育研究第8号. 71-78.
- 高比良公成 (2009) 幸福王国ブータンの知恵. リヨン社:東京, pp.138-141.
- 山口昭男 (2008) 広辞苑. 岩波書店:東京, pp. 2773.
- (平成25年12月27日受付、平成26年3月10日受理)